

# DO-IT Japan 2010 Report

障害のある、あるいは病気を抱えた  
学生のための大学・社会体験プログラム

— 主催 —

DO-IT Japan

東京大学先端科学技術研究センター

— 共催 —

ソフトバンクモバイル株式会社

富士通株式会社

マイクロソフト株式会社

— 協力 —

アジアがんフォーラム

沖電気工業株式会社

オリンパス株式会社

株式会社京王プラザホテル

株式会社資生堂

株式会社トヨタレンタリース東京

株式会社毎日新聞社

株式会社ヤクルト本社

— 後援 —

厚生労働省

文部科学省

(五十音順)



Diversity, Opportunities,  
Internetworking, and Technology  
Japan

DO-IT Japanに関するお問い合わせはこちらまで <http://doit-japan.org/>

発行元／DO-IT Japan 事務局

DO-IT  
Japan

# 閉塞した現代社会に風穴をあける

## ■現代社会に漂う閉塞感

うつ病等の気分障害の患者が100万人を越え、ニートが64万人、ハウジングプアの状態にある人が10万人を超えると推定されている今、問題解決の糸口が見つからず社会に閉塞感が漂っているように見受けられます。この状態に風穴を開けられる要素はどこにあるのでしょうか。私たちは、障害や病気による困難を抱えた若者に、ヒントがあるのでないかと考えています。

## ■閉塞感に風穴を開ける「合理的配慮」

DO-IT Japanでは、2007年から大学受験における配慮申請について、その合理性を示すエビデンスを準備するなどの活動を障害学生と共に行っています。2009年度には、不随意運動のある肢体不自由の学生が、大学センター受験でパソコン利用が認められる等、少しずつ変化が生まれてきていますが、この例以外にはパソコン利用はほとんど認められていないのが実情です。

鉛筆が持てない肢体不自由の学生に、解答用紙に書けというのは無理な話です。そのため、このような学生は「解答時のパソコン利用」などの配慮を申請することになります。腕の筋力が低下したA君は、指先でジョイスティックを操作して車いすを動かしたり、スクリーンキーボードを利用して勉強したりメールを書いたりしています。A君は大学受験に際し、小論文の試験に、スクリーンキーボードを使用して解答したいと大学に申請しました。しかし、ワープロソフトに漢字の変換機能がある点で不公平であるということを理由に申請は却下され、トラックボールで描画ソフトに文字を書くならばパソコンの利用を認めるという返答を得ました。このように一見配慮したようで実は配慮に欠けるような対応もあります。

入試におけるパソコン利用については、漢字について問う問題自体を出題しない、あるいは、漢字問題は配点から除外するなどのアイディアもあっていいと思います。しかし、合理性に関する議論は十分に行われないまま、前例がないという理由で申請が却下されるケースが多数存在します。DO-IT Japanは若者たちと共に合理性に対するエビデンスを示すことで、今後も既存の大学入試制度に挑んでいきます。

配慮の提供なしには生きにくい人が大学だけでなく会社にも存在します。DO-IT Japanは配慮について合理的なデータをもって説明することで、閉塞した社会に風穴を開け、無理な努力をしなくても生活できる社会を実現できると考えています。

DO-IT Japan ディレクター 中邑賢龍

## Contents

- 1 DO-IT Japan2010 夏期体験プログラム
- 2 夏期体験プログラム スケジュール
- 4 夏期体験プログラムを終えて
- 15 社会体験プログラム
- 21 小中学生向けプログラム
- 22 一般公開シンポジウム
- 24 DO-ITで社会を変える
- 25 選抜プロセス・  
参加者データ/メディア紹介

DO-IT Japan 2010 (夏季体験プログラム) 2010/8/4-8/8

—DO-ITは夢を叶えるためのスタートラインを僕にくれました—

## ■次の社会を担う若者たちを育てる

障害や病気をもつ若者にとって、「合理的配慮」を得ることは、入試に限らず重要なことです。日常生活や就職のような場面でも、自らの努力と根性で全ての解決を図るよりは、必要に応じてIT機器や他者の力を借りたり、環境を調整したりすることで本来の能力を発揮できるようになります。努力はそれからすればよいわけです。しかしながら、このように自らの要求と自らを取り巻く様々な状況をふまえて、知識と知恵をもち、周囲に働きかけることのできる人は多くありません。DO-IT Japanでは、下のように3つのステージと3つのプログラムを通じて閉塞した現代社会に風穴を開け、次の社会を担うような若者を育てます。



## DO-ITの3つのステージと3つのプログラム

### Juniors

小・中学生

- リテラシーを育てる
  - 身近なテクノロジーを活用した学習
  - 能力評価と支援技術の適合
  - 携帯電話を活用したコミュニケーション

### Scholars

高校生

- 障害を理解し、配慮を求める
  - 自分に合った支援技術の理解
  - ★ ● 障害に合ったパソコン・携帯電話の理解と実習
  - 入試での合理的配慮の申請と報告
  - ★ ● 異種障害学生との討議
  - ★ ● Living Libraryへ参加
  - ★ ● 企業訪問
  - ★ ● 講義への参加・研究室訪問

### Leaders

大学生

- リーダーとしての先導的取り組み
  - セミナー等での発表
  - ★ Living Libraryにおける語り
  - ★ ● 支援技術を活用した先導的な講義参加の在り方研究
  - ★ ● 企業インターンシップ(予定)
  - ★ ● 海外研修(予定)



★Diversity(多様性を理解する) ●Exploration(探求し行動する) ■Potential(可能性に気づく)

# Schedule

## DO-IT Japan 2010 夏季体験プログラム スケジュール



		9:00~10:00	10:00~11:00	11:00~12:00	12:00~13:00	13:00~14:00	14:00~15:00	15:00~16:00	16:00~	夜	
<b>8.4 Wed</b>	<b>2010年度 スカラー</b>					<b>受付</b>	<b>ガイダンス</b> 「社会におけるDO-ITの役割とは」 中邑賢龍 教授 (東大先端研3号館M2)	<b>レセプション</b> スピーチ：小島憲道氏(東京大学副学長) 藤田正美氏(富士通(株)副社長) 加治佐俊一氏(マイクロソフト(株)最高技術責任者) 島上英治氏(ソフトバンクモバイル(株)執行役員) 中野義昭氏(東京大学先端研所長)		18:30 夕食、ホテルに戻る	20:00 アイスブレイク
<b>8.5 Thu</b>	<b>2010年度 スカラー</b>  リーダー	9:30 マイクロソフト社 集合 (6F受付) 	「ITを通じた 企業市民活動」 大島友子氏	IT利用入門「パソコン・支援機器導入」 実習「DO-ITスカラーが使う支援テクノロジー」 実習「思考の整理を助けるテクノロジー」 	<b>Microsoft 社 訪問</b> <b>ランチセッション</b> スピーチ： 樋口泰行氏(マイクロソフト(株)代表執行役社長) 加治佐俊一氏(マイクロソフト(株)最高技術責任者)		<b>実習「DO-IT Japanオンラインメンタリングについて」</b> 		16:10 まとめ	16:10 夕食、ホテルに戻る	19:00 懇親会
<b>8.6 Fri</b>	<b>2010年度 スカラー</b>  高校生 高卒 スカラー	<b>朝の会</b> 9:40 「光の物理学」 宮野健次郎 教授 (東京大学先端科学技術 研究センター教授) (東大先端研3号館M2)	休憩	「ヒトとチンパンジーのあいだ ～ヒトはどのように特別な チンパンジーか～」 長谷川寿一 教授 (東京大学大学院総合文化研究科教授) (東大先端研3号館M2)	 昼食		ようこそトップランナーたちの ラボラトリーベ! 伊福部研究室見学			19:00 自由行動、夕食、ホテルに戻る	夜の会
	リーダー	<b>オリエンテーション</b>	移動		<b>資生堂 社 訪問</b> <b>企業訪問</b>	移動		<b>ソフトバンクモバイル 社 訪問</b> 実習「好感度NO.1のCM作りに挑戦!」	16:30 休憩	16:30 移動	18:00 ディナー
		<b>朝の会</b> 「光の物理学」 宮野健次郎 教授 (東大先端研3号館M2)		移動、昼食			<b>富士通 社 訪問 (トラステッド・クラウド・スクエア)</b> 実習「新しいノートテイキング」プレゼンテーション準備	17:00 休憩	17:00 移動	18:00 夜の会	
<b>8.7 Sat</b>	<b>2010年度 高校生 高卒 スカラー</b>  小中 保護者	<b>朝の会</b> 「「体を大事にする」 ということ」 多田羅勝義 医師 (国立病院機構徳島病院副院長) (東大先端研3号館M2)	休憩		<b>ランチ交流会</b> (東大先端研3号館M2)		<b>（一般公開シンポジウム）</b> (東大先端研4号館2階講堂) 障害のある学生の大学進学に不安を抱える子どもたち・親御さんのために ～高等教育での障害学生支援の広がりと残された問題 荒木昌美氏(日本学生支援機構) 樋口一宗氏(文部科学省) 高橋知音氏(信州大学) 上野一彦氏(大学入試センター/東京学芸大学) DO-ITスカラー 近藤武夫氏(東京大学 /University of Washington)		<b>交流会</b> (一般参加) (3号館M2)		夜の会
	リーダー	<b>朝の会</b> 「障害を理解する」 中邑賢龍 教授 大河内直之 特任研究員 (東大先端研3号館207)	休憩	<b>うごきながら考えよう たちどまって考えよう」</b> 熊谷晋一郎 特任講師 (東大先端研3号館M2)	<b>相談会</b> (東大先端研3号館M2)		<b>ランチ交流会</b> (東大先端研3号館M2)	<b>「プレゼンテーションを学ぶ」</b> 中邑賢龍 教授 (東大先端研3号館207)		<b>交流会</b> (自由参加) (3号館M2)	夜の会
	小中学生			受付				<b>「テクノロジー体験」</b> 奥山俊博 特任研究員、渡辺崇史氏、大河内直之氏、他 (東大先端研3号館M2)	まとめ		交流会 (自由参加)
<b>8.8 Sun</b>	<b>2010年度 高校生 高卒 スカラー</b>  リーダー	<b>朝の会</b> 「ひとり暮らしを考える」 (東大先端研3号館M2)	休憩	<b>「ロボット時代の創造 ～誰にでも嬉しい未来の バリアフリー社会を目指して～」</b> 高橋智隆 特任准教授 (東大先端研4号館2階講堂)	<b>クロージング セレモニー</b> (3号館M2)						
	リーダー	<b>朝の会</b> リビングライブラリー 大学生が親に障害を語る (東大先端研311)									



娘が1歳の時に、難聴学級設立の運動を始めました。難聴学級の必要性を感じたけれど、引越してきた街にはそれがなかったのです。その時、どうして私は難聴学級が必要なのかということを、当事者である私自身が訴えなければ何も変わらないということを学びました。

娘にはDO-ITでの活動を通じて①当事者が必要なサポートについて具体的に訴えていくことの重要性、②当事者が自分の障害について詳しく説明できること、③聴覚障害に限らず様々な障害のある人、またはそのサポートをしようとしてくれている人の仲間作り

### ～家族から～

娘にはDO-ITでの活動を通じて①当事者が必要なサポートについて具体的に訴えていくことの重要性、②当事者が自分の障害について詳しく説明できること、③聴覚障害に限らず様々な障害のある人、またはそのサポートをしようとしてくれている人の仲間作り

を学んで欲しいと思い、参加を勧めました。現在思春期の只中にある娘は、親から言われる事を素直に受け止められないときがあります。そんな時期でも他の大人からの助言なら素直に受け止められたり、年の近い先輩からのことばにはアリティを感じられたりすること思います。また、私自身も講義に参加させていただいたことをきっかけに、自分が学びたいことを改めて見つけることができました。DO-ITに携わった全ての人々に心から感謝しております。

障害とは、人がもつているものではなくて、社会が作り出しているものだと思います

栗井 優衣



**大**学進学を目指すにあたって不安なことを少しでも取り除きたい、将来法律家になって障害者としての視点を生かしていくために色々な考え方で触れたい、このような思いから参加したDO-ITでしたが、本当に多く最初に驚かされたのは、同年代のスカラーがどの人も、自分自身についてきちんと理解し説明する力や、自分の考えをはっきりと主張する力をもっていることでした。私は、今まで常にいわゆる健常者の中で生活してきたので、家でも学校でも、何も言わなくても周囲に配慮してもらいたい、手を貸してもらうことが、無意識なうちに当然なことのようになっている面がありました。また、逆に自分が少々の無理をしてでも周りと同じように振る舞おうとする意識もあったと思います。今回の期間中にも、最初は慣れない車椅子での移動を全て自力でこなそうしていました。そんなとき、「大事なのは移動ではなくてその後にするべき事なのだから、自分の体力を考えてできない事は自分から誰かに頼むことをしなければいけないよ。」と声をかけられて、自分が無理をすることで他の人にも負担をかけていることや、自分の体を自分で把握しきれておらず、先を見通せていないと

いうことに気づきました。自分で取捨選択をして誰かに頼むということは普段はあまりしない事だったので、いかにいつも周囲に甘えているかということを痛感しました。

もう一つの大きな経験は、テクノロジーの有効活用を学んだことです。マイクロソフト社や伊福部研究室では、様々な障害者が社会でいきていく上で必要な機能が最先端の技術で実現されていました。障害があっても、本当の意味で豊かな生活をすることが考えられていて感動しました。技術がもっと進んで普及していくれば、障害が文字通り「バリア」でなくなるのかもしれないと思いました。障害とは、人がもっているものではなくて、社会が作り出しているものだと思います。私が障害者であるからこそ持つ事ができた考え方を発信していかなければならない、と改めて思うことができました。

5日間で出会った多くの人たちや、そこから学んだことは、これからの大変な糧になると思います。自分の甘さに気づかされることもあったけれど、社会に出て行く上でいちばん大切なことを教わった気がします。本当に充実した5日間でした。



このプログラムに参加した5日間は、自分のことを知り、学び、自分と向き合えたと思います。また、自分と違った障害を持った人や、自分と同じ障害を持った人と触れ合うことで、たくさんの仲間ができたと私は思います。障害の種類は違うけれど、みんなそれぞれに、健常者との間に同じ壁を持っている、そんなことをDO-IT期間中、強く感じました。

普通学校に通っている私は、どうしてもその壁がはっきりと見て、孤独感を感じていました。

しかし、DO-IT期間は、壁が全くなくなったわけではないけれど、薄くなったように思います。そして壁を薄くするには、自分で自分のことを相手に分かってもらい、相手に自分がどのようなことを必要としているのか、はっきりすることだと感じました。

このことは、大学や、社会に出るときに必要だと思います。

また、DO-ITに参加して、自分のことを支えてくださるたくさんの人がいることに、感動しました。自分一人で頑張らなくてもいいのかも、と肩の荷が少し軽くなったと思います。

今まで自分は障害者だから、きっとこれはだめだ、これはできない、と勝手に決めつけていたけれど、自分だって健常者と同じ人間なのだから、やってみる権利はあると思いました。それを一人で頑張らなくてもいい、時には周りの手も借りていいということを学びました。

私はDO-ITに参加する前は自分の障害がとても恥ずかしかったです。自分の障害がとても嫌でした。

自分は障害者だと、障害を受け入れたくなかったのです。DO-ITに参加して、少しずつですが、自分の障害を受け入れていると思います。世界中の人の目の色や、髪の毛の色や、体型が違うことと同じで、障害もそれと同じことだと思います。アクセサリーが少し多いだけだと。こう

いう風に考えることができたのは、自分にとって大きな一歩です。でも、こういう風に考えられるのは、家や、DO-ITにかかわっている時だけです。学校に行くとやはり障害は嫌だと思ってしまいます。少しずつ本当に少しずつ、学校でも障害はアクセサリーというように考えられるようにしていくことが今後の課題です。

自分を5日間支えてくださった企業の方、スタッフの方、スカラーの皆様、ありがとうございました。



DO-ITに参加して、少しずつですが、自分の障害を受け入れていると思います

吉田 純音



### ～家族から～

栗井 小枝美

DO-IT JAPANのことをお優衣を通して学校の先生から紹介して頂き、この趣旨に思わず、本人はもちろん、親も即答で参加することを希望しました。

優衣は、歩行困難で行動が遅くても、何でも自分で頑張つきました。しかし、大学に進学をしたら、どう生活をするのか、どう通学するのか、一人でやつしていくには、不安なことでいっぱいでした。大学生活で、実際に何に困つて、どうなるのかを色々考えています。不安だったことがクリアになりました。大学生活がより身近に現実的になりました。今回参加して体験できたことで、何に病気と向き合い、頑張っている友達になりました。本当にこのように病気と一緒に頑張つていて嬉しいと思います。本当にこのようなプログラムに参加できたことを感謝しています。ありがとうございました。



できないことは仕方ないのだから  
気を楽にしてもいい

井上 恵理也



～家族から～

井上麗子

DO-ITから帰ってきて来たその娘息子は、「自分は甘かった」といつておりました。自ら考え行動することをより深く気づかされたことは、大きな前進です。

これからも DO-ITを通じて、人との出会いを大切にして、より大きく、羽ばたいてほしいと願つております。



息子、恵理也は小学校3年生のときに歩行が困難になり、電動車椅子に乗るようになった6年生どころから急速に体力が落ち始め、中1のとき肺炎で入院して、夜間だけ人口呼吸器を取り付けようになりました。私は何を希望に生きていけばよいかがわからなくなっていました。しかし息子は入院中、高熱と戦いながら「おれは死なへんで」といついていたそうです。

息子は変わりました。毎日欠かさず1時間程竹刀を振り、カロリーの高い食事を控えるようになりました。今では人口呼吸器を外し、毎日元気に学校へ通えるまでになりました。大学進学、独り暮らし、そして社会で働くことを夢見ている息子にDO-ITは、大きな励みになると考え、息子に勧めました。

DO-ITから帰つて来たその晩息子は、「自分は甘かった」といつておりました。自ら考え行動することをより深く気づかされたことは、大きな前進です。

これからも、DO-ITを通じて、人との出会いを大切にして、より大きく羽ばたいてほしいと願つております。

あります。だから、少しだけいいなと思ってしました。

僕は最初とても緊張してしまってあまり話せなかつたのですが三日目くらいには周りの人たちと普通に話せるようになりました。そして、せっかくDO-ITに参加して障害をもっている人たちと会えたのだからと、最後にはがんばって自分から話していました。そのため、普段よりも積極的に自分の意見を言えたのでよかったです。

またDO-ITの期間中はとても忙しく、僕にとっては何より移動が大変でしたが、他の一緒に行動する人のおかげもあってなんとかなりました。東京は僕の地元(和歌山県紀の川市)よりもずっと電車の乗り降りが簡単だったことや、道に段差が少なくて移動しやすかったので、こんなに便利になっているのかどうれし

それでも実際は、とても疲れました。今回は五日間というごく短い期間だけだったので大丈夫でした。けれど、僕が大学生になって独り暮らしをするときには「毎日外を移動することができるようにならないと。」と思いま

した。それからヘルパーの人に介助や家事を頼むときには、ちゃんと伝えられるように気を遣わないといけないなあと思いました。

僕はDO-ITに参加していろいろなことを知り考えさせられて、とてもよい経験を得られました。



～家族から～

かしたい将来こんな仕事がしたい、人暮らしがしたい等、誰もが抱く夢です。障害を持つ若者が、実際に行動を起こしていることを知り、わたしは感動しました。

息子は、筋ジストロフィーのウールリヒ型です。筋肉の力が弱いのが特徴です。

性格は、楽天的で、マイペースで、正直です。「がんばらたらできる」なんとかなる」と、息子はよく言います。正しいのですが、これからは、がんばるところと、がんばらなくてもいいところを見分け、積極的に行動をしてほしいと思います。

DO-IT Japan 2010を経験して、息子は変わりました。今年の夏 DO-IT で、息子は貴重な何かをつかんできたという実感があります。

The image consists of two photographs. The top photograph shows two young men in a classroom; the one on the left is smiling while looking at a laptop screen, and the one on the right is also looking at the screen. The bottom photograph shows three young men; the two on the right are smiling, and the one in the foreground is laughing heartily.

**私**はこれまで障害があるためにできること周りの人に手助けしてもらうということをあまりしてきませんでした。それは例えば長距離の移動や、重い荷物を持つことなどですが、それがなぜかと考えたときに自分の中に「ただがんばりたい」というとても中途半端な気持ちがあったからだと気がつきました。しかし時にはそのために他の人に心配をかけてしまうことが何度もありました。

そのため私は今回のDO-ITに参加するにあたり  
人にものを頼むようにするという目標を立てました。しかし  
実際参加してみると「できるけどお願ひする」、しかし  
「全て任せにしてはいけない」というやり方はなかなか  
か難しく、なれていない私には何を頼めばいいのか、  
何を頑張ればいいのかがよくわかりませんでした。

もう一つ私がこの期間中に感じたことは他のスカラーミなさんの障害について知っていることがあまりにも

なかったということです。そのため始めは自分が困るだけしか気遣いができず今相手が困っているというにすら気がついてあげられませんでした。そのたびアドバイザーやチューターの方に注意されてしまうとすることがDO-ITの期間中に何度かありました。しかし一度わかれれば後はお互いに助け合うことができました。の体験は私の大きな財産になったと思います。

私は、小、中、高と普通学校に通っていたこともあり、これまで自分を障害者だとはっきりと意識したことは一度もないように思います。障害者手帳も持っていますがあまり積極的には利用してきませんでした。かしこれからは自分の障害についてもっと理解しりの人にはない自分だけの武器にできればと思うです。

DQ-JTに出会えて本当によかったです。



みなさんの障害について知っていることが  
あまりにも少なかつた

木村 徹朗

正直なところ、DO-ITの参加には私自身少し不安があった。勉強に集中させたいという気持ちと、この夏の異常気象で体力が持つか心配だったからだ。それでも今年は絶対に参加するという娘の強い意志に後押しされた感じだった。結果 DO-ITで得た物は私が想像していた以上の成果があつた。体験の中から、こうしよう、あしたほうがいい、と私に報告してくれた内容から今までと違う我が家をみた。それと同時に一番解っているようで、「一番解っていないのが私かもしれない」と改めて反省をした。Living Libraryの時川端舞さんの話を聞いて、自分が娘に求めている事が、本人にとってどれほどつらいものかを知られました。舞さんありがとうございました。

### ~家族から~

DO-ITの試みは、娘に希望とやる気を与えてくれました。これもひとえに関係者の皆様のお蔭だと感謝しています。DO-ITが発信源となって、多くの障害者に生きる喜びをもたらしてくれる事を願ってやみません。本当に有り難うございました。

今回のDO-ITに、娘が初めて参加をさせて頂き、心より感謝を申し上げます。

正直なところ、当初は期待よりも不安の思いが強くあり、親としてどのように過ごせばよいかと思つておりました。しかし、DO-ITまでのあいだ、子どもの元々持つている前向きな心と、DO-ITに対する大きな大きな期待の思いが、良い緊張とともに膨らんで行く姿を見て、喜んで送り出すことが大切であると思えるようになりました。

### ～家族から～

ありがとうございます。



同じように障害をもちながらも、大学や自分の夢の為に頑張っている人がいる

遠山 弘晃



今回DO-IT Japanに参加していろいろな障害をもつ同世代の人たちや、大学生スカラーの皆さんと話をしたり、5日間行動をともにしたことは私にとって、とても大きなものでした。以前、私は少しでも健常者と同じように、少しでも近づけるようにと、焦っていましたが、今回のDO-ITに参加してスカラーの皆さんと話したり、講義を聞いたりして、今まで大丈夫で、社会へ出て行っても助けてくれる機関や人たちはたくさんあるのだと知り、自分に自信を持つことができました。

また、自分と異なる障害をもつ人と行動を一緒にして、どのような様なことで困っているのか、共感できるのか、どのような夢を持っているのか、など初めて気づくこともたくさんあり、違った世界を見ることができ、自分自身成長できました。

私は、大学進学後は独り暮らしをしようと思っています。ですが、不透明なところが多かったのですが、グループセッションなどで独り暮らしへ向けて何が

必要かということが見えました。また、電車を使っての移動や目的地への移動時に、駅内で迷つてしまったり、ホテルへなかなか行けなかったりと苦労し、独り暮らしでの移動の大切さも知りました。迷いながらも、皆で相談したり、人に聞いたりしたことは、私にとってとてもよい経験になりました。独り暮らしに向けて、自分は何ができる、何ができないのか、ということも今回の参加を通して分かったので、それをどのように解決していくのかということは、これからの私の課題だと思います。

なにより皆と仲良くなれて良かったです。同じように障害をもちながらも、大学や自分の夢の為に頑張っている人がいると思うと、自分自身励みにもなり、頑張ろうと思えます。また、ロボットや機械義手を作りたいという夢を再確認することもできました。こういった気づきや出会いの機会を与えてくれたDO-ITに感謝したいと思います。今回参加できて本当に良かったです。これからもDO-ITに関わっていきたいと思います。

### ～家族から～

遠山 由美子

高校に入学して、さあどうやって子離れしようか?と、思つていたところに、校長先生からDO-ITのことを参考になればと紹介頂きました。自立していくつてもうには、本当に良い機会だと思いました。中途障害の彼は障害を受け入れられず、苦しんでいたと思います。

参加したことによって、多くの仲間に出会い、支えてくださる方々があることを知り、この夏、貴重な体験ができます。

息子が随分変わりました、「回りも二回りも成長したように思います。気持ちも楽になったようで、表情も柔らかくなつたように見えます。彼は障害を受け入れられず、苦しんでいたと思います。

このプログラムがもっと多くの方に広がつて、ハンディキャップのあるひとたちが、もっと楽に生きることができたら素晴らしいと思います。これからも益々のご発展をお祈り致します。



私は特別支援学校に通つていて、障害の多様性については理解できていると思つていました

永野 椎奈



DO-ITに参加して、たくさんの方と話をし、意見を交換しました。そこで得た知識・経験は、私を確実に成長させてくれたと思います。例えば、私は普段、点字ブロックの上でも平気で止まつてましたが、それは視覚障害の方の妨げになってしまいます。そのような当たり前のこと今回何度も指摘していただき、気付くことができました。また、私は特別支援学校に通つていて、障害の多様性については理解できていると思っていましたが、DO-ITでは私が今まで知らなかつた障害をもつ方々とも出会い、それぞれが直面している困難があることを知りました。このような経験は、私の世界を見る目を変え、考えを深めてくれました。

5日間の中で特に大変だったのは、時間の管理です。プログラムは時間がきっちり決まっていて、分単位で行動しなければいけません。私にとっては初めての東京だったので、電車の時間や移動にかかる時間がわからず、遅刻してしまつることもありました。中盤になると

ようやく慣れてきて、気持ちにも余裕を持つことができましたが、これが5日間ではなく毎日続くかもしれないを考えると、大学生になるに向けて体力と気力を鍛えなければいけないと思いました。

5日間はとても充実していて、だけど短くも感じました。多くの人と接することができる機会がありました、もっとじっくり一人一人と話をしてみたかったというが本音です。言いたいことも聞きたいことも、まだたくさんありました。だからこそ私は、DO-ITの魅力のひとつであるオンラインでの繋がりを大事にしていきたいと思っています。今のテクノロジーは進歩しすぎて私には使いこなせない、と敬遠していた部分もありましたが、上手く利用すれば生活を楽にできるし、何より、今回出会えた仲間と再び交流できます。このことは私の支えとなり続けます。多くの機会を提供していただき、本当にありがとうございました。DO-ITの一員として、これからもよろしくお願ひいたします。

DO-ITは参加する前から夢を叶えるためのスタートラインを僕にくれました



**僕**がDO-ITを知ったのは母のおかげです。まだ自分の障害ことも知らない、僕が学校から帰ってきたときに呼ばれ障害について教えてもらい、そうかあと納得しこれが自分の障害で今まで大変だった「集中すること」が難しいのは障害のせいなどと、おもいました。けれど、今まで見つけることができなかった「個性」がわかり、それが自分の「個性」だと思いつつうれしかったです。そして母が「まだ医学部に行きたいと思ってるの?」と言いつ、「微妙」と答えた後、「まだいる可能性があるよ、もし行く気があるならこれに参加してみない?」とDO-ITの応募用紙を渡され、一度諦めかけていた児童精神科医になるためにも、いろいろな人にもっと会って話したいと思い参加を決めました。だからDO-ITは参加する前から夢を叶えるためのスタートラインを僕にくれました。

そして、参加一日目にみんなに会ったときに仲良くなれるかなと緊張しました、夜ご飯の時自分たちで

お店を探すのが大変で人に聞くということを覚えました。二日目では、マイクロソフト社でランチの時自分から話しかけられるようになり、まだ慣れてないけど夜にみんなと話をして、慣れてきていつの間にかみんなと仲良くなつてとても楽しかったです。そして三日目は自分を意識できた日でした、新しいチーフーと行動をするときに僕は都会に慣れているから歩くのが早すぎてみんなを置いてきぼりにしてしまい、チーフーに「後ろを見て」と言われ自己中心な行動をしていたことに気づき、それからは後ろを見るようにしたり、みんなの後ろを歩くようにしたりといろいろな工夫をしました。部屋替えで自己紹介をして自分はこの人に何ができるかを考えながら話を聞くようになりました。四日目は、今まで学んだことを生かしながら行動しました。まだ自分にとって足りないことはいっぱいあるのでそこをできる限り埋められるようにDO-ITの五日間は終わったけど、頑張りたいです。



### ~家族から~

DO-ITを通して私達親子は、未来に希望の光を見出すことができました。「人はその人にしか果たせない使命を背負って産まれてくる」そう信じる私は拓哉と彼の同志であり友であることを一切に願っています。

橋口 拓哉

### ~家族から~

**森 良枝**

DO-IT Japanに参加させて頂きました。して本当にありがとうございました。このセミナーで心からうれしかったことは、雄大が「お互いの悩みや苦しみなどを共に励まし合い成長する力にできる仲間」と知り合えたことです。小中学校そして高校と社会への入口に近づくにつれ、親でもわかつてあげることができない「障害」という壁にぶつかることも多くなってきたと思います。高校進学では実験が見えにくいかから危ないという理由で、希望の学科の受験はできませんでした。現に高校進学では実験が見えないから危ないという理由で、希望の学科の受験はできませんでした。身体の障害への悩み、時にはなぜ自分ができない、「障害」ということでしまう。でもDO-ITの仲間がいれば、立ち向かう勇氣もでてくるとおもいます。中邑先生はじめたくさんの方、DO-ITのスタッフの皆様本当に世話をになりました。皆様とのこの出会いが雄大の心の成長や大学就職へつながる道しるべとなると思います。そして皆様の出会いに感謝をこめて「自分なりに一杯進む」ことのできる人間になつてほしいとおもっています。一人暮らしをしている大学生のスカラーラーの皆様、親として勇気と希望をいただきました。どうかどうか、精一杯自分らしく前に進んでいくことを心より応援しています。

**D**O-ITに参加する前、僕はとても不安の気持ちでいっぱいでした。参加要項は事前にいただいた資料で研修内容や参加者等を確認していましたが、うまく5日間みんなとよく話したり、仲良くできるか心配でした。

実際にDO-ITに参加して僕は今の日常生活で体験できないことを経験たくさんことを学び、多くのものを得ることができました。

僕が一番大変だと思ったことは電車を利用した移動です。東京都内は多くの電車・地下鉄が走っており、移動には不可欠なものです。新宿駅はとても広くていろんな電車が通っていたので、どれに乗れば目的地にたどり着けるか、自分たちだけで電車を探すのがとても大変でした。一つ電車を間違えると違う方向へ行ってしまうので駅員のひとに聞いたりしてなんとか電車に乗ることができます。慣れるまで一人での電車の移動は大変なんだなあと感じました。

僕が一番参加してよかったと思ったことはいろんな障害をもつた人たちと話したり、友達になれたことです。僕は小中学生の時は自分の障害について深く考えたことがなかったので、DO-ITに参加していろんな障害をかかえた人に出会えて、障害をかかえているひとの体験や苦労話等を聞けて自分自身の障害についても見つめなおすことができました。みんなとの会話はとても有意義なものでした。

企業訪問ではこれまでの社会に必要なIT機器の操作方法などを教えていただき、これからもっともっと自分でさらに勉強の必要性を感じました。来年のDO-ITでは、成長したスカラーラーのみんなとあうことがとても楽しみで、自分自身も切磋琢磨し成長していきたいです。障害があることを恐れず、何事にもチャレンジしなければならないと思われた5日間でした。

DO-IT事務局・スカラーラー・参加者皆さんに感謝。



一番参加してよかったですと思つたことは、いろんな障害をもつた人たちと話したり、友達になれたことです

森 雄大



橋口 亜希子

DO-ITを知るまでの私達親子は、思春期に入り更に感情や行動をうまくコントロールできないADHDをもつ拓哉と、親でありながら頭では理解していくでも感情がついて行かない私達と衝突が絶えず、未来に不安を抱いていました。

しかし、DO-ITを知つて拓哉のペクトルが未来へと一気に向きました。自分の特性がADHDであると自分自身を知つて障害を前向きに捉えたこと。やる気がおきず、成績が低いから医大には行けないと度々あきらめたり「亡くなつた主治医のような児童精神科医になりたい」との夢をもう一度決意したこと。私は資料作成だけでも意義があつたと実感しています。そして実際に参加して拓哉は、様々な障害をもつ仲間と触れ合つて他者理解の大切さと自分らしさを見つけ、夢に向かつて困難に負けずに純粹に進んでいく仲間達の姿に影響されて、自分がどうあるべきか自己管理に目を向けられるようになります。

5日後に大きく変化した拓哉を見て、ある意味親として寂しさを感じました。それは自らの手で人生を切り拓く「自立」を目的としているDO-ITを通して、今まで私は拓哉の手を引っ張つて生きてきましたが、これからは拓哉の後ろに立ち背中を見守つて生きていく「子離れ」を実感したからです。



DO-IT Japanプログラムを通して、私は、大学生活をイメージすることができました。なかでも、一番印象に残っているのが、都内やキャンパス内の移動についてです。私は、介助なしで、電車などを使った長距離移動をしたことがありませんでした。そのため、大学生活でも今までと同様に、手動の車いすで移動できると思っていたのです。しかし、予想外に長く、そして急な坂を目の前にした時、電動車いすの必要性を痛感しました。そこで、DO-IT期間中に電動車いすを試乗する機会があり、実際に操作したところ、上り坂や芝生の上でも、風をきって走ることができます。だから、大学生活に向けて、電動車いすの導入を検討したいと考えています。

そして、このDO-ITで、さまざまな障害をもつ友達ができました。私の障害は、脳性麻痺による肢体不自由ですが、視覚障害や聴覚障害、高次脳機能障害などの、私と違う障害をもつ友達と出会うことができたのです。私は今までに、私と同じ肢体不自由の障害をもつ友達としか会ったことがありません。だから、これ

以外の障害について理解することは、容易ではありませんでした。しかし、障害は、一人ひとり違いますが、どんな障害にせよ、まだ社会に困難があることはよく分かります。そしてその困難を克服し、学校や社会に出るために、それぞれが努力をしていることは、よく分かるのです。たとえ、障害や困難が違ったとしても、それを乗り越えて、社会に貢献したいという志は、全く同じだと思います。

次のDO-ITまで、スカラーのみんなとは、はなはなになりますが、私たちは、オンラインメンタリングで繋がっています。私には、障害を抱えながらも頑張っている同志が、全国にいると思うだけ、私は強く励まされ、エネルギーが湧いてくるのです。だから、メールやチャットを通して、障害のある友達同士だから相談できる悩みを共有し、励ましあいたいと思います。そして、次のDO-ITで再会したとき、互いの歩みや成長を、一緒に喜びたいと思います。

山崎 康彬  
障害や困難が違ったとしても、  
それを乗り越えて、社会に貢献したいという志は、  
全く同じだと思います



### ～家族から～

山崎 忠文

DO-IT Japanプログラムの存在を康彬から初めて聞き、熱い参加意向を語られたときは、正直驚き、また交通機関の乗り継ぎのことを考えると、不安になりました。初めての一人旅、しかも喧騒の大都会東京です。元来、康彬は養護学校から一般の学校への転校を自ら希望したように、一般集団の中での活動を志向する子です。自ら可能性を切り開いて、こうという姿勢に親としても胸を打たれ、OKを出しました。その後の、移動の際のサポート要請など彼の準備は素早く、予想以上の成長ぶりを見せてくれました。障がい者が整備された仕組みを利用して社会参加し、障がい者も幸せになれるという実績を示すことが何より求められます。そのためには障がいをもつ人たちが、実際に利用して社会に貢献することができます。そういう意味で、大学進学を通じて社会参加を後押ししていただけ、康彬を含む11人の仲間にエールを送ります。



## —DO-IT Japan 2010 社会体験プログラム—

共 催

**Microsoft**

共 催

**FUJITSU**

共 催

**SoftBank**

協 力

**OKI** Open up your dreams

協 力

**OLYMPUS**

協 力

**KEIO PLAZA HOTEL**

主 催  
**DO-IT**  
Japan

協 力  
**SHISEIDO**

協 力  
TOYOTA 株式会社トヨタレンタリース東京

協 力  
Univ.Tokyo RCAST

協 力  
株式会社毎日新聞社

協 力  
人も 地球 も 健康 に  
**Yakult**

協 力  
Asia Cancer Forum  
<http://www.asiacancerforum.org>

以下の大学・機関の先生および学生の皆様にもご協力いただきました。

愛媛大学

香川大学

関西学院大学

慶應義塾大学

国立看護大学校

国立病院機構徳島病院

星槎大学

筑波大学

日本社会事業大学

日本大学

日本福祉大学

ワシントン大学

早稲田大学

(五十音順)

新しい技術を活用したノートテイクで、効率的に情報収集・整理し、考える力を身につける  
／マイクロソフト株式会社



相手に効果的にメッセージを伝え、議論をする力を身につける  
／富士通株式会社



## 新しいノートテイキング

障害や病気をもつ若者にとってITを活用することは、自らの能力を發揮する上で強力なツールとなります。ところが、多くの人は、身边にあるIT機器が持つ力に気づいていません。

DO-IT Japanは、身边にあるITツールを組み合わせることで、日常に存在する困難を低減することができると考え、困難を抱える若者たちへ積極的な活用を勧めています。2010年度は、その一つの試みとして、デジタルノートソフトウェア、スキャナー、携帯電話を組み合わせることで、困難を抱える学生のノートテイクに新しいソリューションを提案しようと考えています。その鍵となるのが、マイクロソフト、富士通、ソフトバンクモバイル各社のもつ先進的製品を活用することです。今後このような企業コラボレーションの輪が広がっていくことで、新しいエンパワメントツールが生まれ、困難を抱える人々を新しい社会へと導いていくことができるでしょう。

今回、私は大学生として2度目のDO-ITプログラムへ参加させていただきましたが、より多くのことを学んだのではないかと実感しています。

マイクロソフト社での実習では、支援技術をいかに活用していくのかということについて学びました。その中で使い方を学んだMicrosoft OneNoteは、非常に画期的なソフトであるという印象を受けました。従来のワープロソフトでは、決められた行や枠内にしか文字を入力することができましたが、OneNoteでは、自分の好きな場所に、キーボード入力やマウスなどで手書き入力した文字を書くことができるという点が非常にすぐれていると思いました。普通のノートに鉛筆でメモするような感覚で使用できることで、まさにデジタルノートになります。さらに、ICレコーダーやスキャンスナップなどの機器と組み合わせることにより、OneNoteを効率よく活用し、一つのノート上でプリント資料や音声情報、メモ等を整理できるので、手指が動きにくく、細かい動作が困難な私にとっては非常に便利です。まだ、使い慣れていない部分もありますが、今後、大学の講義や自宅学習などで私たちがOneNoteを活用し、意見や感想を反映させていくことにより、多くの人々がこのようなソフトの存在を知り、さらに使いやすいソフトへと発展することを願っています。

(國光良 07年度スカラー／筋ジストロフィー)



今回のDO-ITではOneNoteやScanSnap、ICレコーダーを組み合わせた新しいノートテイキングの方法を教わり、わかりやすいノートが簡単に作れることを学びました。資料をスキャナーで読み込み、パソコンだけで教科書・ノート・資料を1つにまとめられるので整理も簡単にでき、試験勉強も効率よくできそうだなと思いました。大学の講義にもこれらの技術を活用していくたいと思います。また、プレゼンテーションやリビングライブラリーでは「自分の考えを相手に伝える」ことの難しさと重要さを実感しました。富士通社でのプレゼンテーションでは、資料や話し方によって伝わり方も異なることを学びました。働くことについて考えていく中で、富士通の方のプレゼンを聴き今まで就職に対して持っていた怖いイメージから、自分の夢を探したり明確にするチャンスととらえることでイメージが変わり前向きに考えられるようになりました。また就職することが目的ではなく就職という手段によってその後どうしたいかを考えることが大切という言葉がとても印象的でした。就職することが目的のように思ってしまいがちでしたが、これから社会に出ていく上で手段が目的化していないかということを常に考えて行動しようと思いました。今後は今回の経験で得たことをもとに就職について具体的に考えていきたいと思います。

(関根彩香 08年度スカラー／頸髄損傷)



私が、今回DO-IT Japanのプログラムの中で見つけた自分の課題は、自分の障がいとそれによって生じる困難を、他の人に判るように伝えられるようになる、という事です。

私は今回のプログラムの中で、パソコンを使って、「働くことに対する不安」というテーマでプレゼンテーションを作り、それを発表しました。発表をする中で気づいた事は、自分がどんな障がいをもっているかは判っていても、そのためにどんな事で困っているのか、ということを、まだ他の人に対して上手く説明することができない、ということでした。自分で自分の事が判っていないと、痛感させられました。

私の今後の目標は、自分自身の事をもっと良く知り、それを他の人に伝えられるようになる、という事です。高校までは、両親が学校に私の障がいについて説明し、理解してもらえるよう働きかけてくれました。しかし、これからは社会の中で生きていくために、自分で自分の苦手な事と、出来る事を把握しておかなければなりません。それが出来なければ、誰かに支援を求める事も難しくなります。今回は最終日にリビングライブラリーの活動を行いましたが、それも自分の事を他の人に伝える、良い練習になったと思います。

私は今年から、DO-IT Japanの大学生リーダーになりました。私は、DO-IT Japanの後輩達に生き方のモデルを示せるようなリーダーになりたいと思っています。その為にもまずは自分自身を見つめなおして、その上で自分に出来る事は何かを考えていきたいと思います。

(市川樹 08年度スカラー／アスペルガー症候群)



**CM作成を通じて、期限のある中で考え、結果を出すことの重要性を経験する**  
／ソフトバンクモバイル株式会社



**化粧と写真撮影を通じて自己表現を学ぶ**  
／株式会社資生堂／株式会社毎日新聞社



ソフトバンクモバイルでの企画・発表体験では、中々頭が働かず、自分の無力を感じました。こんな難しいことを出来てしまう社員さんはすごいとも思いました。  
私の障害は広汎性発達障害です。広汎性発達障害は、対人関係の形成や想像することが苦手で、コミュニケーションが下手で、姿勢の崩れ、多動や不器用さをもつなどの特徴がある発達障害です。また、今はうつ状態でもあり、波はありますが、気力や思考力が落ちていたり興味や感情が失われたりマイナス思考になったり、どうしてもぼーっとしてしまったりするときが多いです。自分が何に困っているのか、どうしたらその困難うまく付き合えるかまだ自分で把握できていないので、少しづつ把握していく説明できるようになりたいです。

(大町祐太郎 09年度スカラー／広汎性発達障害 )

企業訪問などの体験から、一つの仕事や事業には多くの方が関わっていることも学ぶことが出来、社会の仕事や多くの商品に対する見方が変わりました。今回社会体験プログラムでは本当に多くの方々の仕事について学ぶことが出来ましたが、やはりすべての人がうまく関わり合い仕事をし、会社を動かしている様子を見ることが出来ました。  
そういった経験の中で、自分の中の一番の発見は人間関係の大切さを学べた事だと思います。多くの仲間と話をしたり、社会の人と人の関わりを間近で見ることで、仲間や人との関係の大切さに改めて気付きました。

(寺島正樹 09年度スカラー／ラルセン症候群)



私には高次脳機能障害による失語症があるため、ソフトバンクでの研修の限られた時間の中で企画を考えるということがとても困難に感じました。同じグループの人と案を出し合っていく中で、相手に伝わるような言い回しが上手くできない自分に飽きられ苛立ち、その日は夜中まで一人反省会をしていました。社会に出て働くとなれば、今まで以上に伝えることの難しさに直面するだろう。失語症はどう向き合いどう克服するか、またはどう付き合っていくべきか、残りの3年間半の間に少しでも多くの方法を考えていかねばならないと強く感じています。

(加藤あすみ 09年度スカラー／高次脳機能障害 肢体不自由)

**社会生活のなかでの場に即した立ち居振る舞い方を身につける**  
／京王プラザホテル





### 沖電気工業株式会社

夏季体験プログラム準備期間に、配付資料作成用の印刷機をご提供いただきました。DO-ITでは多くの資料を印刷するため、高速大量印刷のできる高性能プリンターが大活躍でした。



### オリンパス株式会社

2010年度スカラー全員にICコレーダーをご提供いただきました。スカラーはメモにICレコーダーを活用しています。DM-4はテキスト音声読み上げに対応し、読みに困難のある人に役立ちます。



### 株式会社トヨタレンタリース東京

夏季体験プログラム期間に、リフト付き車両をご提供いただきました。自力での移動が体力的に難しいスカラーの移動に、車いす対応の車両を使わせていただくことができ、とても助かりました。

## リビングライブラリー

仲間と障害について考え、それぞれが自分の障害を語る中で、障害とは何かについて考えるよい機会となった。その中で初めて気づかされたことがある。“障害は不便であっても不幸でない”というが、本当にそうだろうか。時には障害者である自分を不幸と考えてもよいのではと思っていた。障害をポジティブに捉え、明るく生きるのはよいが、やはり障害をもって生きるのは大変なことが多いのだからと考えていたためだ。誰でも(当然健常者も)できないことがあれば落ち込むのだから、それを理由に落ち込んでもいいと。自分では20年間も障害児・者として生活してきているので、このことについて考え、自分なりの答えをもっていると思っていた。

特に、大学に入り、心理学を学ぶ中で、「自分は何者なのか。」を知りたいと思う気持ちが強くなり、その過程において、私と障害は切り離せない関係にある。自分の障害を考えるうえでそれを傍観者のように見つめることも必要であるとプログラムを通じて痛感した。障害者としてしか生活した経験がなく障害は自分の一部であるため、考えていたつもりでいて社会の中で障害がどう位置づけられているのかについて考えたことすらなかった。

リビングライブラリーに参加して、特にそのことを実感した。前日に内容や手段を決定したため、明らかに準備不足で、何を伝えたいのか自分の中で明確化できなかった。私自身がわかっていないものを相手に伝えるなんてできるわけがない。もちろん、話す際は、伝え方も工夫しなくてはならないが。

人に何か伝える時は、伝えたいことを明確化し、相手に届く言葉や距離がカウンセリングでは大切だという。もちろん、リビングライブラリーの活動と心理臨床の場面で行うことは異なるが、言葉を用いて、明確に伝えてゆく点は共通していると思う。心理士を目指すものにとり、自己理解は大切であると言われるが、障害について考えることは、自己理解をしていくために必要なプロセスである。

(吉田佐保子 07年度スカラー／脳性まひ)



### 自分たちの困難を解消するテクノロジーについて リテラシーを身につける

DO-IT Japanでは障害や病気による困難を解消するために、テクノロジーを利用することをスカラー達に教えています。手で文字が書くことが困難な人にはワープロ、考えをまとめることが困難な人にはマッピングソフトの活用といったように、困難に対して支援技術を用いることで、本人の本当の力が発揮できるような環境を整えることが大切だと考えているためです。しかしながら、テクノロジーの利用にもいくつか問題があります。それは、普段からそれらテクノロジーを使っていないと、いざ受験や就職という場面に出会ったときに、うまく活用できないのです。また、このようなことの背景には、それらテクノロジーを使うことで自分の困難を解消できるということを、そもそも知らないこともあります。自分の困難が解消できる技術が身近なところにあるにも関わらず、それを知らないために必要以上に努力を重ねる中で、心が折れてしまう人たちもいます。DO-IT Japanでは、そのような問題に対し、小・中学生という早い時期から、テクノロジーの活用について知らせていく必要があると考え、本年度より小中学生プログラムを開始しました。

#### プログラム内容

- ・自己紹介をしよう
- ・障害とテクノロジーの関係について知ろう
- ・障害のある人がどのように働いているのか見てみよう
- ・テクノロジーを体験してみよう  
肢体不自由グループと発達障害グループに分かれて、グループワーク



#### 参加者の感想

- ・iPadが楽しかったです(脳性まひのある小学6年生)
- ・iPadがあれば重い教科書を持ち運べることがわかりました(肢体不自由のある中学2年生)
- ・テクノロジーを使えば漢字を書くことができました(LD・アスペルガー症候群のある小学6年生)
- ・勉強法のヒントが得られました(書字障害・アスペルガー症候群のある中学3年生)

## 障害のある学生の大学進学に不安を抱える子どもたち・親御さんたちのために ～高等教育での障害学生支援の広がりと残された問題～

高等教育への進学を望む、障害のある学生本人を取り巻く状況は、依然厳しい状況ですが、日々、変化を続けています。障害学生の高校から大学への移行についての情報を共有するために、公開シンポジウムを行いました。



### シンポジウム前半

### 障害のある学生の進学を取り巻く最新の話題

話題提供者1 荒木昌美氏(日本学生支援機構学生生活部特別支援課)

#### 「障害学生に関する実態調査および教職員研修プログラム」

高等教育機関における障害学生の数は漸増しており、平成20年5月で6,235人、学生全体の0.19%となった([http://www.jasso.go.jp/tokubetsu\\_shien/chosa0801.html](http://www.jasso.go.jp/tokubetsu_shien/chosa0801.html))。また、日本学生支援機構の新たな取り組みである、教職員向けの障害学生支援に関するガイド([http://www.jasso.go.jp/tokubetsu\\_shien/guide/top.html](http://www.jasso.go.jp/tokubetsu_shien/guide/top.html))や研修プログラム([http://www.jasso.go.jp/tokubetsu\\_shien/kentouiinkai.html](http://www.jasso.go.jp/tokubetsu_shien/kentouiinkai.html))が紹介された。

話題提供者2 樋口一宗氏(文部科学省初等中等教育局特別支援教育課)

#### 「高等学校での障害学生支援」

平成19年度から行われている高等学校における発達障害支援モデル事業([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/21/06/1268884.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/21/06/1268884.htm))を中心に、高校での多様な取り組みが紹介された。授業、テストおよび評価の工夫、進路指導の取り組み事例(しかし、進学支援についての検討はあまり行われていない)。親や教師共同での障害理解に関する勉強会を通じた、周囲の理解啓発、ワークショップによる生徒の自己理解支援。その他、生徒ごとに個別の支援チームを作る取り組みや、週に一回の障害学生についての校内委員会の実施、特別支援教育コーディネータ複数指名、自習室の設置、スクールカウンセラーの増員など、高校における多様な支援事例が報告された。

話題提供者3 高橋知音氏(信州大学)

#### 「なぜ進学後につまづくのか・高校までの『学校』と大学の違い」

信州大学・学生支援GP([http://www.shinshu-u.ac.jp/good\\_practice/s\\_support/](http://www.shinshu-u.ac.jp/good_practice/s_support/))を通じた大学での支援の取り組みと、障害学生自身が意識すべきポイントについての発表。大学では、大人として自立と自己決定が求められるようになる事実、「得意・不得意」での進路選択の必要性、早めの支援を自ら求めることなど、自分の強みを生かすための工夫が紹介された。

話題提供者4 上野一彦氏(大学入試センター／東京学芸大学)

#### 「大学入試センター試験と『発達障害』特別措置」

これまで提供されていなかった読み書き障害やADHD、自閉症スペクトラム障害など発達障害への特別措置が新設され、平成23年度のセンター試験(2010年9月の出願)から、開始されることが報告された。

上野先生ブログの関連記事は <http://edublog.jp/kaz1229/archive/195>

### シンポジウム後半

### 障害のある当事者の体験談と将来への提言

#### 大学入試を経験した様々な障害のある学生たちの体験談

##### 「障害を説明することで変わり始めた大学入試」

DO-ITとの連携により、特別措置の根拠となるデータを添付して申請することで、センター試験での特別措置に明記されていない計算過程の代筆やパソコン利用、時間延長が認められた事例。また根拠を示して説明しても措置が許可されなかつた部分についての体験報告。詳細は、日本学生支援機構障害学生支援情報のページ([http://www.jasso.go.jp/tokubetsu\\_shien/](http://www.jasso.go.jp/tokubetsu_shien/))に平成21年度障害学生受入促進研究委託事業実績報告書の東京大学担当部分として掲載予定。

- ・木下 昌さん(頸椎損傷による四肢まひ)…四肢まひのために書字ができないため、数学の計算過程を代筆してくれる代筆者が許可された。
- ・川端 舞さん(脳性まひによる肢体不自由、構音障害)…肢体不自由により書字が困難なため、パソコンの数式記述ソフト(計算機能なし)を使った数学受験が許可された。
- ・石前 翔平さん(筋ジストロフィーによる肢体不自由)…ワープロによる文字入力が許可されず、マウスとペイントソフトによる文字の筆記のみが許可された。
- ・小林 春彦さん(高次脳機能障害による視空間認知・注意障害)…読字の困難をサポートする読み上げソフトの利用は許可されなかつたが、認知面の障害で国内で初めて試験時間延長が許可された。

指定討論者:近藤武夫氏(東京大学／University of Washington)

##### 「合理的配慮という観点から見た高等教育における学生支援」

障害学生支援を取り巻くステークホルダへ、今後推進が必要な取り組みについて提言が行われた。

#### 国への提言

- ・高校・大学の障害学生の入試における連携を裏付ける制度的保障を用意する
- ・障害者権利条約に基づく「合理的配慮」を受験においても公式に認める

#### 大学入試センターへの提言

- ・特別措置の申請および決定通知の時期を早める
- ・大学入試センター受験説明会を活用し障害学生への配慮について高校向けの情報提供を行う
- ・大学入試センターの特別措置施策を設計変更:「障害種別ごとの措置」から「困難ごとの合理的配慮」へ
- ・特別措置申請とその結果を透明化するため情報公開を進める:特別措置申請の内訳(障害区分でまとめず申請された措置の項目でまとめる)と決定結果の統計を提示

#### 大学組織への提言

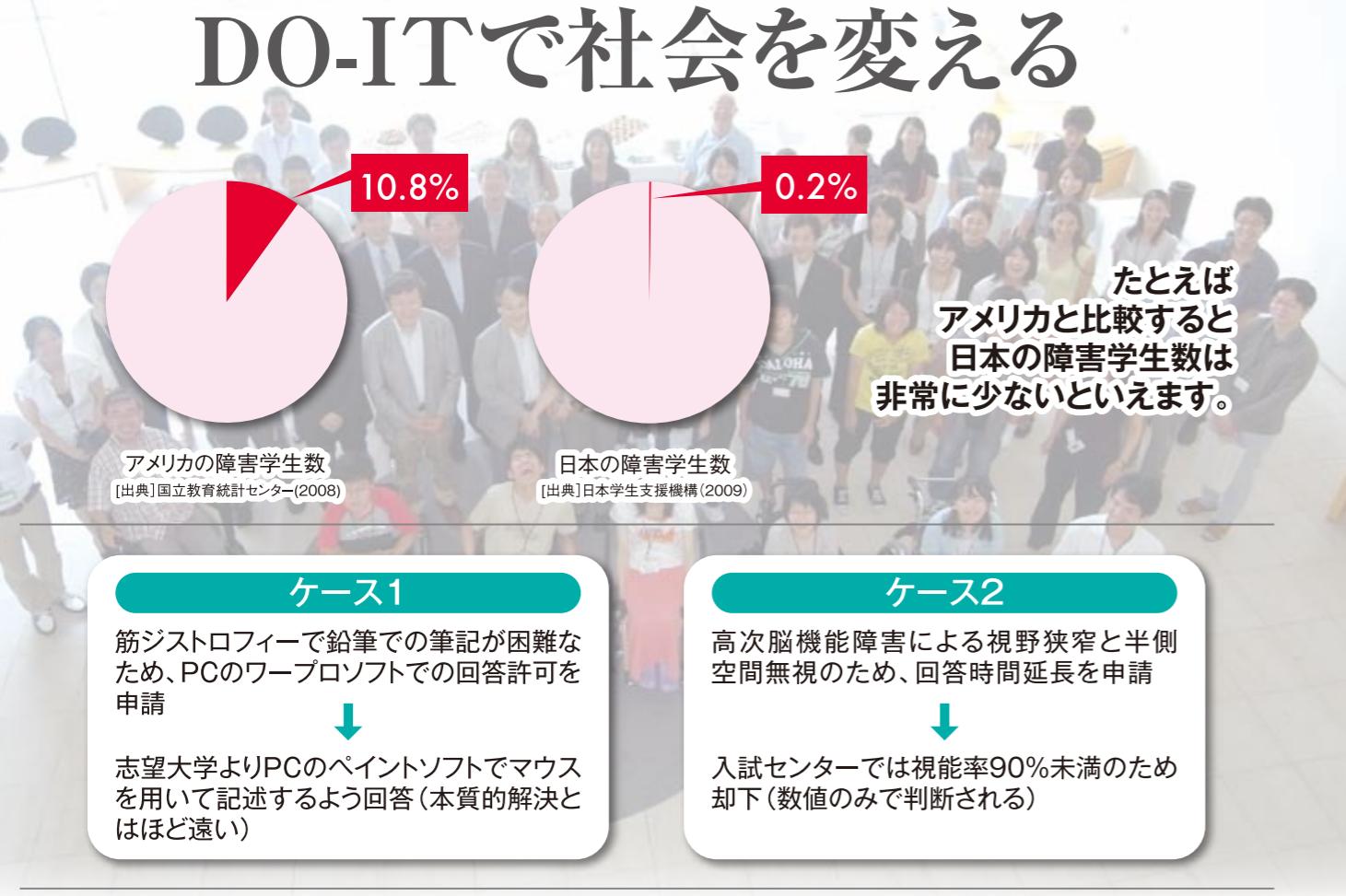
- ・合理的配慮の提供に関して、各高等教育機関で独自の方針を公開する
- ・障害学生の入試における特別措置決定に(入試課だけでなく)特別支援の専門家を介在させる
- ・現状の特別措置メニューを充実させる
- ・特別措置申請とその結果を透明化するため情報公開を進める

#### DO-ITへの提言

- ・合理的配慮の提供に対する社会のコンセンサスを得る活動を行う
- ・受験の合理的配慮に関する専門家のアセスメントや相談サービスを提供する
- ・障害を合理的に説明し、具体的な代替手段を提案するためのリテラシー教育を、障害学生や教師、保護者に行う

来場者の皆様に株式会社ヤクルト本社様から飲料をご提供いただきました▶



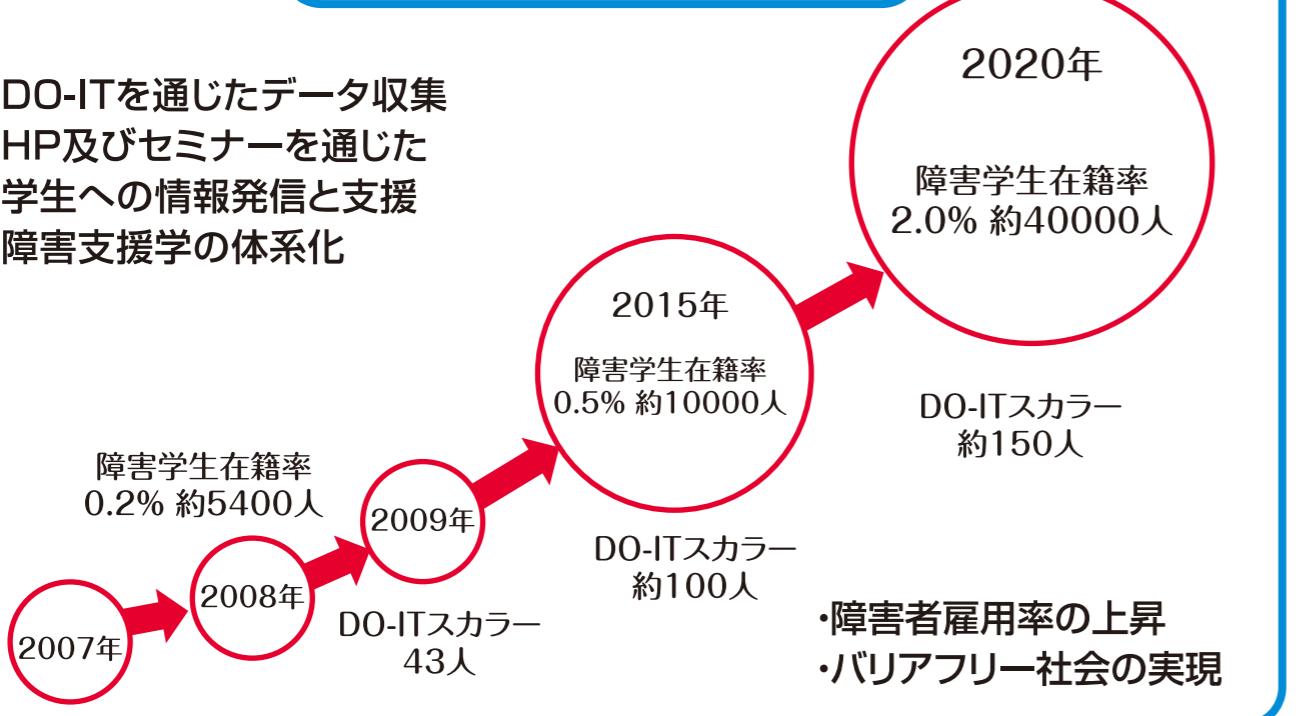


DO-IT Japanでは、全国から選抜された障害のある、あるいは病気を抱えた高校生、高卒者に  
コンピューターとその人の困難に応じた支援機器を提供し、  
大学進学や将来の就職という本人の希望の実現をお手伝いします。

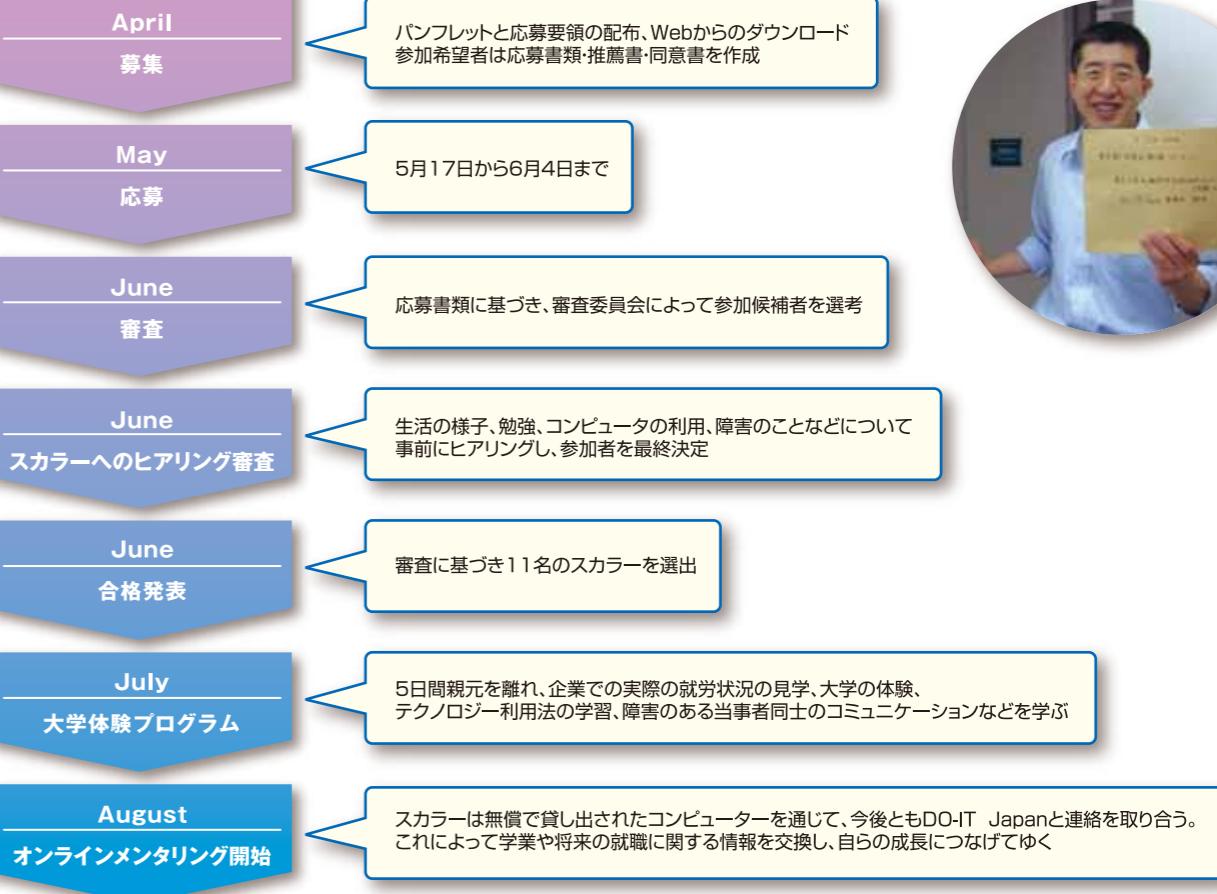
DO-IT Japanでは、そのプログラムの中で、自らの困難について他者に伝え、それによって  
合理的な配慮を得られる力を身につけてもらうことで、次世代の社会を担うリーダーを育てます。

## ★DO-ITの活動の未来★

- DO-ITを通じたデータ収集
- HP及びセミナーを通じた
- 学生への情報発信と支援
- 障害支援学の体系化

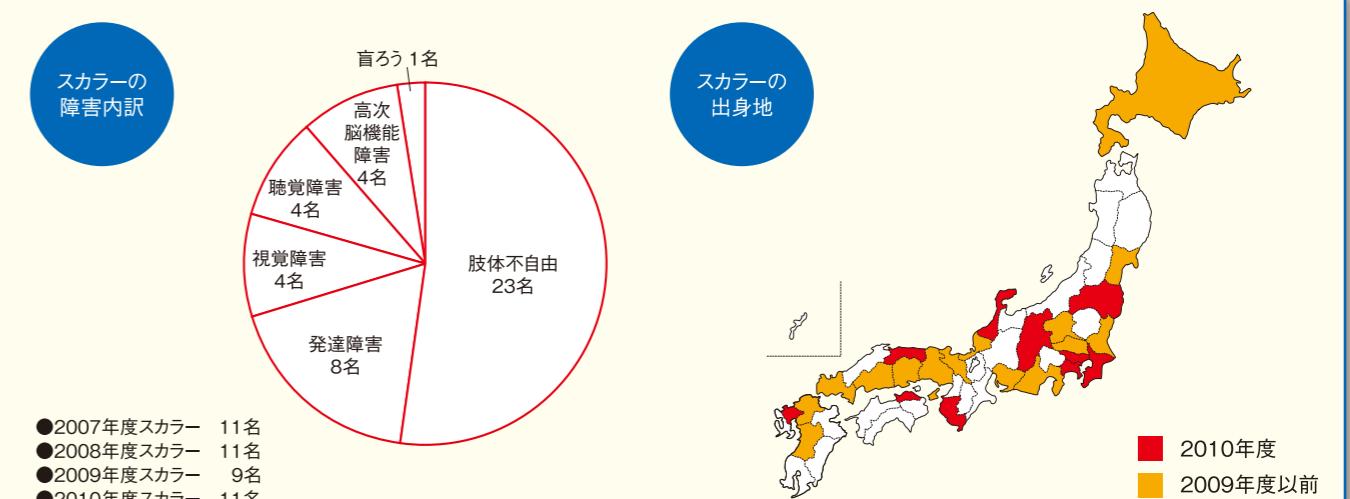


# Process



to be continued...

DO-IT Japan スカラーデータ



DO-IT Japan 実績データ

DO-IT 大学進学者数

年度	スカラ数	合格者数
2007年度	11	10
2008年度	11	8
2009年度	9	1

2010年度のメディア掲載

メディア	掲載日
TV	NHKニュース 2010/8/5
	インターネットニュース 2010/8/5
	日本経済新聞 2010/8/5
	毎日jp 2010/8/5
	PC Watch 2010/8/5
	IT PRO 2010/8/5
	PC Online 2010/8/5
	ケータイwatch 2010/8/6
	IT PRO 2010/8/6
	PC Online 2010/8/6
	日経BP 2010/8/9

※スカラ数には高校在学中の者が含まれます